

No. 353【2019年4月19日配信】

「日本における農村医療発祥の地」の碑 (担当:鈴木)

こんにちは！桜の季節もうすぐですね。この週末は市内を散策して、春を感じてみませんか。

歴史資料室では、先週から新しい館内展示を始めました。テーマは「あおり遊覧3—三内霊園・月見野霊園・平和公園～市内の公園に残る平和への祈り～」です。今回は、春の花が美しく咲く公園を取り上げてみました。

そして、7階エントランスでは、東北本線南方移転によって生じた線路跡が整備された遊歩道緑地と、その周辺についてご紹介しています。今回は、そこで取り上げた記念碑についてお話しします。

松原1丁目の遊歩道緑地と松原通りが交差する付近に、平成14年(2002)に青森県農村医学会が創設30周年を記念して建立した、銀色に光る「日本における農村医療発祥の地」の碑があります。

なぜ、この碑はここに建てられたのでしょうか？それは、この場所で広区域医療利用組合の嚆矢である「東青病院」が発足したからなのです。

昭和の初め頃、青森県では医師の数はまだまだ足りず、医師のいない農村部では医療を都市部に頼らざるを得ないうえ、往診を頼むにも多額の費用がかかるために十分な医療を受けられずに命を落とす人もありました。



「日本における農村医療発祥の地」の碑

そこで、初代組合長となる稲垣村出身の岡本正志おかもとせいしが中心となり、そうした農村部の人々をはじめ都市部の裕福ではない人々からも出資金を募り、組合員のための病院をつくるため、昭和3年5月に有限責任東青信用購買利用組合を設立しました。この組合は当初、青森市を中心に、その周辺の1町10村という広い範囲を事業区域とし、こうした広区域の医療利用組合としては全国で初めてのものでした。

そして、同年9月にこの碑の付近にあった粗末な建物を借りて「東青病院医療所」が開かれたのです。

発足当初は医師も2名しかおらず、資金難や医師会の反対に合うなど経営に苦心した東青病院でしたが、のちに国道4号沿いに移転し、近代的な設備と低廉な費用で受診できることで、多くの人が組合に加入し大きく発展しました。しかし、昭和20年の青森空襲により建物は焼失してしまいました。

やがて、昭和22年に現在の堤町1丁目に病院は再建されましたが、事業を引き継いでいた県厚生農業協同組合連合会から青森市に同33年に移管され、現在の青森市民病院が発足したのです。

※今回のトリビアは『青森県下市立病院二十五年史』を参考にしました。